

「浄土三部経」などが説く「見える」ものや「見えない」もの：

西方浄土変は阿弥陀浄土を描いたものではない

So-called Saihō-jōdohen does not represent Buddha Amida's Western Pure Land

外村中

はじめに

いわゆる浄土教においては、「見える」ものや「見えない」ものに関連して、阿弥陀の仏身と仏国土についての理論が展開されている。小稿では、その内容を理解する上でとくに重要であろうと思われる情報を、代表的な漢訳仏典から抽出し、初歩的な考察を加えながら、分析整理する。

とりあげる仏典は次のとおりである¹⁾。「浄土三部経」（すなわち1.『阿弥陀経』、2.『無量寿経』、3.『観無量寿経』）、および4.『往生論』、5.『大乘同性経』。

小稿では次のような視点をもって分析をおこなう。①「見える」ものか「見えない」ものか。②廣大無限なるものか否か。③常なるものか否か。④楽なる（すなわち変化をしない）ものか否か。⑤我なる（すなわち絶対的に有なる）ものか否か²⁾。⑥浄なるものか否か。③～⑥をまとめれば、いわゆる常楽我浄なる（すなわち常楽我浄の四つの特徴を同時にあわせもつ）ものか否か。

これまでの分析により、インド、中国を問わず大乘仏教においては、たとえば、〈衆生には「見えない」だけ〉の理論を確立させる契機をもたらしたものとして『（大乘）涅槃経』が、〈廣大無限なるもの〉の理論を展開させる契機をもたらしたものとして『華嚴経』が、仏身と仏国土についての理論を詳しく検討する時にとりあげられるべき經典であろうことがわかっている。では、「浄土三部経」などが説くところは、如何なる特徴をもつものであろうか。

以下小稿では、阿弥陀は、正確には原語「アミターバ」に相当する場合には「無量光仏」と、原語「アミターユス」に相当する場合には「無量寿仏」と表記すべきではあるが³⁾、よりシンプルな考察をおこなうために、とりあえず区別はせず、どちらも「阿弥陀」と表記する。また、阿弥陀の仏国土は、初期の段階からいわゆる「浄土」としてとらえられてきたわけではなさそうであるから⁴⁾、浄土とはせず、「仏国土」と表記して分析をおこなう。

1. 『阿弥陀経』

¹ データベースとしては、CBETAを利用する。ただし、筆者の判断で句読点を改めたり下線などを施したりするところもある。また、参考のために、「浄土三部経」については、中村元、早島鏡正、紀野一義（訳註）『浄土三部経』上、無量寿経（岩波書店、2000年）。同（訳註）『浄土三部経』下、観無量寿経、阿弥陀経（岩波書店、2000年）を用い、以上をそれぞれ岩波上、岩波下と略しその該当箇所を頁数をしめす。また、『往生論（無量寿経優波提舍願生偈）』については国訳大蔵経（国訳と略す）の、『大乘同性経』については国訳一切経（一切と略す）の頁数をしめす。

² この点は、すべてのものは根本たるもの（すなわち我あるいはそれに相当するもの）によって発現されるとする考え方にもとづく視点である。

³ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970年）、287-335頁。

⁴ 平川彰『浄土思想と大乘戒』平川彰著作集第7巻、（春秋社、1990年）、95-116頁。

1-1. 『阿彌陀經』が説くところ

まずははじめに分析する『阿彌陀經』は、阿彌陀の仏国土はすぐれたところであり、そこに往生するとよいから⁵⁾、阿彌陀を信仰すべきと説く經典である。その仏身論は、時に「見える」ものであるが、廣大無限なるものではない色身（あるいは生身）に相当するものによる一身説といえそうである。また、その仏国土論も、「見える」ものであるが、廣大無限なるものではない仏国土について説くものらしい。

『阿彌陀經』は、後秦の鳩摩羅什（後350年頃-409年頃／一説に344年-413年）が後402年に漢訳した經典で、梵本およびチベット語訳も伝わっている。一方、『阿彌陀經』の原典が成立した年代については、よくわからない。後140年頃（あるいはそれよりも少しく以前）とする説もあれば⁶⁾、後3世紀後半から4世紀前半にかけてとする説もある⁷⁾。近年の研究によれば、『阿彌陀經』の原典は『無量壽經』系の『大阿彌陀經』（すなわち『仏説阿彌陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』）および『平等覺經』（すなわち『仏説無量清淨平等覺經』）の原典よりも後に成立したものとされる⁸⁾。筆者は思うに、あるいはそうかもしれないが、仏身と仏国土について『無量壽經』が説くところは、『阿彌陀經』が説くところよりも展開が進んだ内容を含んでいるようである。それゆえ、小稿では先に展開が進んでいないと思われる内容をしめす『阿彌陀經』の方から考察することにする。

『阿彌陀經』の原典が成立した地方についても、よくわからない。あるいはガンダーラかもしれないが⁹⁾、あるいはそうではないかもしれない。というのは、次による。『阿彌陀經』には、菩薩の筆頭として文殊があげられている¹⁰⁾。したがって、『阿彌陀經』は文殊との関連が強い經典と考えられる。その文殊については南方インドとの関連が指摘されている¹¹⁾。一方、ガンダーラとの関連が強い菩薩としては弥勒があげられそうである¹²⁾。それゆえ、『阿彌陀經』の原典（あるいはその思想）がガンダーラで成立したとは直ちにはいえないようにも思われる。

1-2. 『阿彌陀經』が説く仏身

ここでは『阿彌陀經』が説く阿彌陀の仏身の特徴を分析する。

⁵⁾ 『阿彌陀經』（巻1）T12,347b「舍利弗。眾生聞者。應當發願。願生彼國。（岩波下144）」

⁶⁾ 中村元「『淨土三部經』解説」『淨土三部經』下、觀無量壽經、阿彌陀經（岩波書店、2000年）、235-255頁、251頁。

⁷⁾ 静谷正雄「羅什訳『阿彌陀經』の成立について」（『印度学仏教学研究』25(1)、1976年）95-100頁、100頁。

⁸⁾ 静谷正雄「羅什訳『阿彌陀經』の成立について」、95頁。辛嶋静志「大乘仏教とガンダーラ：般若經・阿彌陀・觀音」（『創価大学国際仏教学高等研究所年報』17、2014年）、449-485頁、468頁。

⁹⁾ たとえば次は、大乘も阿彌陀も西北インド成立であろうとする。矢吹慶輝『阿彌陀佛の研究』増訂改版（明治書院、1937年）、138頁。

¹⁰⁾ 『阿彌陀經』（巻1）T12,346c「并諸菩薩摩訶薩。文殊師利法王子。阿逸多菩薩。乾陀訶提菩薩。常精進菩薩。與如是等諸大菩薩。（岩波下121,135）」

¹¹⁾ 赤沼智善『仏教經典史論』、249-250頁。静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』、268頁。

¹²⁾ 辛嶋静志「大乘仏教とガンダーラ」、459-460頁。

①阿弥陀の仏身は、時に「見える」ものである。求道者は阿弥陀のことを一心不乱に信仰していたら、臨終の時に阿弥陀が眼前に立つとされるから、そう解釈される。

◇『阿彌陀經』(卷1) T12,347b「若有善男子。善女人。聞說阿彌陀佛。執持名號。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛。與諸聖眾。現在其前。是人終時。心不顛倒。即得往生。阿彌陀佛。極樂國土。(岩波下140)」

②阿弥陀の仏身は、広大無限なるものではない。阿弥陀の仏国土は西方にあり、阿弥陀は現在そこで説法をしているとされ、また、求道者は往生する(すなわちそこまで移動する)わけであるから、そう解釈される。

◇『阿彌陀經』(卷1) T12,346c「從是西方過十萬億佛土。有世界。名曰極樂。其土有佛。號阿彌陀。今現在說法。(岩波下136)」

◇『阿彌陀經』(卷1) T12,347b「若有善男子。善女人。聞說阿彌陀佛。執持名號。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛。與諸聖眾。現在其前。是人終時。心不顛倒。即得往生。阿彌陀佛。極樂國土。(岩波下140)」

③阿弥陀の仏身は、ほぼ常(ただし有始)なるものである。寿量が無量無辺阿僧祇劫とされるが、成仏してより十劫とされるので、有始なるものである。なお、「無量無辺阿僧祇劫」は必ずしも無終ではないことを意味すると解釈を展開させることも可能であろう。

◇『阿彌陀經』(卷1) T12,347a「舍利弗。彼佛光明無量。照十方國。無所障礙。是故號為阿彌陀。又舍利弗。彼佛壽命。及其人民。無量無邊阿僧祇劫。故名阿彌陀。舍利弗。阿彌陀佛。成佛已來。於今十劫。(岩波下139)」

④阿弥陀の仏身は、楽なるものではない。説法をしているとされるので、不動なるものではなく変化をするものであるから、そう解釈される。

◇『阿彌陀經』(卷1) T12,346c「從是西方過十萬億佛土。有世界。名曰極樂。其土有佛。號阿彌陀。今現在說法。(岩波下136)」

⑤阿弥陀の仏身は、我なるものではない。以上によれば、広大無限なるものではなく、ほぼ常なるもので、楽なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものにとらえられるから、そう解釈される。

⑥阿弥陀の仏身は、浄なるものか否か、『阿彌陀經』が直接的に説くところからは不明である。

いずれにせよ、③～⑥をまとめれば、『阿彌陀經』が説く阿弥陀の仏身は常楽我浄なるものではない。

1-3. 『阿彌陀經』が説く仏国土

ここでは『阿彌陀經』が説く阿弥陀の仏国土の特徴を分析する。

①仏国土は、「見える」ものである。たとえば、七重の欄楯があるとされるから、そう解釈される。ただし、仏国土はそこに至りさえすれば衆生にも「見える」もののように思われるが、はたしてそうであるかどうか厳密なところはよくわからない。

◇『阿彌陀經』(卷1) T12,346c「極樂國土。七重欄楯。七重羅網。七重行樹。皆是四寶。周匝圍繞。是故彼國。名曰極樂。(岩波下136)」

②仏国土は、広大無限なるものではない。西方に位置するとされるから、そう解釈される。

◇『阿彌陀經』（卷1）T12,346c「從是西方過十萬億佛土。有世界。名曰極樂。其土有佛。號阿彌陀。今現在說法。（岩波下136）」

③仏国土は、ほぼ常なるものである。阿彌陀はほぼ常（ただし有始）なるもので、その阿彌陀が住するところであるから、そう解釈される。

④仏国土は、樂なるものではない。昼夜があるとされるので、変化をするものであるから、そう解釈される。

◇『阿彌陀經』（卷1）T12,347a「晝夜六時。天雨曼陀羅華。（岩波下137）」

⑤仏国土は、我なるものではない。以上によれば、廣大無限なるものではなく、ほぼ常なるもので、樂なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものととらえられるから、そう解釈される。

⑥仏国土は、淨なるものか否か、『阿彌陀經』が直接的に説くところからは不明である。いずれにせよ、③～⑥をまとめれば、『阿彌陀經』が説く阿彌陀の仏国土は常樂我淨なるものではない。なお、次によれば、阿彌陀の仏国土は一つの三千大千世界のようにある。ただし、梵本およびチベット語訳には「三千大千世界」の記載はない。要検討。

◇『阿彌陀經』（卷1）T12,347b-c「西方世界。有無量壽佛。無量相佛。無量幢佛。大光佛。大明佛。寶相佛。淨光佛。如是等恒河沙數諸佛。各於其國。出廣長舌相。遍覆三千大千世界。（岩波下142）」

2. 『無量壽經』

2-1. 『無量壽經』が説くところ

次に分析する『無量壽經』は、阿彌陀の仏国土はすぐれたところであり、そこに往生するとよいから¹³⁾、阿彌陀を信仰すべきと（『阿彌陀經』よりも）詳しく説く經典である。その仏身論については、『阿彌陀經』との関連から見た場合、基本的には、時に「見える」ものであるが、廣大無限なるものではない色身（あるいは生身）に相当するものによる一身説といえそうである。ただし、「真仏」とその分身に相当する「化仏」の用語が見られるので¹⁴⁾、二身説ととらえることもできよう。また、「見えない」もので、廣大無限なる法身に相当するものに関する思想が取り込まれているようにも解釈される。「見えない」もので、廣大無限なるものという点については、その仏国土論においても同様である。以下で詳述する。

『無量壽經』は、大正蔵では曹魏の康僧鎧（後3世紀）の訳とされるが、近年の研究によれば、実際には劉宋の仏馱跋陀羅（後359-429年）と宝雲（後449年没）が後421年に共訳したもので、とくに漢訳という点では宝雲によるものとされる¹⁵⁾。

『無量壽經』にはそれ自体をあわせて漢梵蔵七種の異訳異本があり、そこに説かれた法蔵菩薩（後の阿彌陀仏）の誓願（すなわち誓い、こころざしのようなもの）の内容により、次のよ

¹³ 『無量壽經』（卷2）T12,272b「生欲於今世。見無量壽佛。應發無上。菩提之心。修行功德。願生彼國。（岩波上187）」

¹⁴ 『無量壽經』（卷2）T12,272b-c「其人臨終。無量壽佛。化現其身。光明相好。具如真佛。與諸大眾。現其人前。即隨化佛。往生其國。住不退轉。功德智慧。次如上輩者也。（岩波上188）」

¹⁵ 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房佛書林、1993年）、66頁、77頁。

うに二十四願系、四十八願系、三十六願系の三つの系統に分類される¹⁶⁾。なお、二十四願系、四十八願系、三十六願系の順に成立したとされる¹⁷⁾。

二十四願系：『大阿彌陀經』 『平等覺經』

四十八願（あるいは四十七願）系：『無量壽經』 『無量壽如來會』 「梵本」 『チベット訳』

三十六願系：『無量壽莊嚴經』

『無量壽經』の原典が經典として成立した年代は、あるいは後 133 年頃以降であったかもしれない¹⁸⁾。そう思われるのは、『無量壽經』系の最も古い經典である『大阿彌陀經』と『平等覺經』の内容に、あるいはそれらの原典がシャカの入滅後「後五百歳」に成立したことを間接的にしめすものではなかろうかと思われる次のような内容が見られるからである¹⁹⁾。なお、筆者はシャカの入滅年は前 368 年頃と推定する。したがって、「後五百歳」入りの年は後 133 年頃ということになる。

◇『大阿彌陀經』（巻 2）T12,310c-311a 「其人亦復於城中。五百歳竟乃得出。至阿彌陀佛所。心中大喜。」

◇『平等覺經』（巻 3）T12,292c 「其人亦復於城中五百歳。五百歳竟乃得出。生無量清淨佛所。心中大歡喜。」

また『無量壽經』の原典が經典として成立した地方は、『無量壽經』に記される当時の社会状況から、クシャーナ王朝治下であろうとされる²⁰⁾。筆者は思うに、おそらくそのとおりであろう。『華嚴經』系の思想が取り込まれていること（後述）、ガンダーラとの関連が強い弥勒が対告者となっていることも²¹⁾、そのように考えられる理由に加えられよう。

阿彌陀は、次によれば、そもそもは無量壽仏アミターユスではなく無量光仏アミターバであったらしい²²⁾。とくに『大阿彌陀經』と『平等覺經』においては、阿彌陀が般涅槃に入る（入滅する）ことが説かれている点には注意が払われるべきであろう。

◇『大阿彌陀經』（巻 1）T12,309a 「佛言。阿彌陀佛。至其然後般泥洹者。其蓋樓亘菩薩。便當作佛。」

◇『平等覺經』（巻 3）T12,291a 「佛言。無量清淨佛。至其然後般泥洹者。其蓋樓亘菩薩。便當作佛。」

¹⁶⁾ 平川彰『浄土思想と大乘戒』、40 頁。

¹⁷⁾ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』、385-391 頁。

¹⁸⁾ 後 100 年よりも後であることについては、たとえば次を参照。静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』、66 頁。

¹⁹⁾ ただし、『無量壽經』に対応する内容は見られない。なお、「後五百歳」は、『小品般若經』や『法華經』などにも見られる。『小品般若經』（巻 4）不可思議品 T08,555b 「舍利弗白佛言。世尊。後五百歳時。般若波羅蜜。當廣流布北方耶。舍利弗。後五百歳。當廣流布北方。」『妙法蓮華經』（巻 6）藥王菩薩本事品第二十三 T09,54b-c 「若如來滅後。後五百歳中。若有女人。聞是經典。如說修行。於此命終。即往安樂世界。阿彌陀佛。大菩薩眾。圍繞住處。生蓮華中。寶座之上。（岩波下 204）」

²⁰⁾ 中村元「『浄土三部經』解説」、249-251 頁。

²¹⁾ 辛嶋静志「大乘仏教とガンダーラ」、459-460 頁。

²²⁾ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』、306-309 頁。平川彰『浄土思想と大乘戒』、192 頁。辛嶋静志「大乘仏教とガンダーラ」、466 頁。

一方、『無量寿経』においては、阿弥陀は無量寿仏で寿命長久となっている。ここに変化が確認されるのである²³⁾。

◇『無量寿経』(巻1) T12,270b「佛語阿難。無量壽佛。壽命長久。不可稱計。(岩波上 37, 172)」

一説によれば、阿弥陀はガンダーラの金箔押し釈迦牟尼立像から生まれたもので、無量光と無量寿という二つの称名(属性)を最初から有していたとされる²⁴⁾。しかしながら、筆者は思うに、以上の変化から判断するに、そのように結論することは直ちにはできないであろう。

2.2.『無量寿経』が説く仏身

ここでは『無量寿経』が説く阿弥陀の仏身の特徴を分析する。先ずは、時に「見える」ものであるが、広大無限なるものではない色身(あるいは生身)に相当するものに着目する。というのは、『阿弥陀経』の内容との関連から考えるに、おそらくはそれが本来の思想にもとづくものであろうと思われるからである。なお、「見えない」もので、広大無限なる法身に相当するものと思われる仏身については、後述する。

①阿弥陀の仏身は、時に「見える」ものである。心からまみえたいと願い努力する者の臨終の時に現れるとされ、また、菩薩は阿弥陀のところに行けば、阿弥陀にまみえることができるとされるから、そう解釈される。

◇『無量寿経』(巻2) T12,272b「其上輩者。捨家棄欲。而作沙門。發菩提心。一向專念。無量壽佛。修諸功德。願生彼國。此等眾生。臨壽終時。無量壽佛。與諸大眾。現其人前。即隨彼佛。往生其國。(岩波上 187)」

◇『無量寿経』(巻2) T12,272c「彼土菩薩眾。往觀無量覺。(岩波上 189)」

②阿弥陀の仏身は、広大無限なるものではない。その仏国土は西方にあるとされ、また、菩薩は阿弥陀にまみえるためには阿弥陀のところに行かなければならないから、そう解釈される。なお、大衆部が説くところによれば、わざわざ行かなくてもよさそうであるから、阿弥陀の仏身は大衆部が説く色身のようなものではなさそうである²⁵⁾。

◇『無量寿経』(巻1) T12,270a「法藏菩薩。今已成佛。現在西方。去此十萬億刹。其佛世界。名曰安樂。(岩波上 169)」

◇『無量寿経』(巻2) T12,272c「彼土菩薩眾。往觀無量覺。(岩波上 189)」

③阿弥陀の仏身は、ほぼ常(ただし有始)なるものである。阿弥陀は『無量寿経』においては無量寿仏と呼ばれ寿命長久とされるが、成仏してより十劫とされるので、有始なるものである。なお、「寿命長久。不可稱計。」は、衆生にはその寿命を計ることができないだけで、実は有終と解釈を展開させることも可能であろう。

◇『無量寿経』(巻1) T12,270b「佛語阿難。無量壽佛。壽命長久。不可稱計。(岩波上 172)」

²³⁾ 大田利生(編)『無量寿経：漢訳五本梵本蔵訳対照』(永田文昌堂、2005年)、118頁。

²⁴⁾ 田辺勝美「阿弥陀仏の起源：無量光・無量寿仏はガンダーラの金箔押し仏像から生まれた」(『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』2019年)、11-35頁、23頁。

²⁵⁾ 拙稿「いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現された」を参照。準備中。ただし、実は同様なものであるが、他の仏国土に住するためにそうであると解釈を展開させることもできるかもしれない。

◇『無量壽經』(巻1) T12,270a「阿難又問。其佛成道已來。為經幾時。佛言。成佛已來。凡歷十劫。(岩波上169)」

④阿弥陀の仏身は、楽なる(すなわち変化をしない)ものではない。説法をし菩薩に授記するとされるので、不動なるものではなく変化をするものにとらえられるから、そう解釈される。

◇『無量壽經』(巻2) T12,273c「無量壽佛。為諸聲聞。菩薩大眾。頒宣法時。都悉集會。七寶講堂。廣宣道教。演暢妙法。(岩波上196-197)」

◇『無量壽經』(巻2) T12,273a「梵聲猶雷震。八音暢妙響。當授菩薩記。今説仁諦聽。(岩波上190-191)」

⑤阿弥陀の仏身は、我なるものではない。以上によれば、廣大無限なるものではなく、ほぼ常なるもので、楽なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものにとらえられるから、そう解釈される。また、「一切は空にして無我」というのも参考になろう。

◇『無量壽經』(巻2) T12,273a「通達諸法門。一切空無我。專求淨佛土。必成如是刹。(岩波上191)」

⑥阿弥陀の仏身は、浄なるものらしい。その仏国土に往生する者は清浄なる色身をもつとされるが、仏身はそれ以上と思われるから、そう解釈される。

◇『無量壽經』(巻1) T12,271b「彼佛國土。諸往生者。具足如是。清淨色身。(岩波上180)」

③～⑥をまとめれば、『無量壽經』が説く阿弥陀の仏身は常楽我浄なるものではない。

2-3. 『無量壽經』系の經典が説く仏国土の特徴

次に『無量壽經』系の經典が説く阿弥陀の仏国土について検討する。まずはそれに関する異訳異本共通の状況描写として、次のような特徴がすでに指摘されている²⁶⁾。なお、(3)については後でもとりあげる。

- (1)西方に位置する。
- (2)地獄、餓鬼、畜生などが存在しない。
- (3)日、月、星辰がなく、暗黒がない²⁷⁾。
- (4)スメール(須弥山)等もなく、大海もなく、平坦である。
- (5)池、泉または河があり、水は欲するままにある。
- (6)七宝で樹木が飾られている。
- (7)宝樹が風に吹き動かされて、快い音を出す。
- (8)風が吹くと、地面は香り高い美しい花で敷きつめられる。
- (9)神と人間との区別はなく、他化自在天のようである。
- (10)一切の享受がそなわっていることは、他化自在天のようである。

2-4. 『無量壽經』が説く仏国土

²⁶⁾ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』、442-447頁。

²⁷⁾ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』、443頁。大田利生(編)『無量壽經：漢訳五本梵本蔵訳対照』、92頁、116頁。

ここでは『無量寿経』が説く阿弥陀の仏国土の特徴を分析する。まずは、「見える」ものであるが、広大無限なるものではない仏国土に着目する。というのは、『阿弥陀経』の内容との関連から考えるに、おそらくそれが本来の思想にもとづくものであろうと思われるからである。なお、「見えない」もので、広大無限なる仏国土に相当するものについては、後述する。

①仏国土は、「見える」ものである。たとえば多くの樹木があるとされるから、そう解釈される。ただし、仏国土はそこに至りさえすれば衆生にも「見える」もののように思われるが、はたしてそうであるかどうか厳密なところはよくわからない。

◇『無量寿経』(巻1) T12,270c「其国土。七寶諸樹。周滿世界。(岩波上174)」

②仏国土は、広大無限なるものではない。その仏国土は西方にあるとされるから、そう解釈される。

◇『無量寿経』(巻1) T12,270a「法藏菩薩。今已成佛。現在西方。去此十萬億刹。其佛世界。名曰安樂。(岩波上169)」

③仏国土は、ほぼ常なるものである。阿弥陀はほぼ常(ただし有始)なるもので、その阿弥陀が住するところであるから、そう解釈される。

④仏国土は、楽なるものではない。たとえば、風が吹くとされ、変化をするものであるから、そう解釈される。

◇『無量寿経』(巻1) T12,271a「清風時發。出五音聲。微妙宮商。自然相和。(岩波上175-176)」

⑤仏国土は、我なるものではない。以上によれば、広大無限なるものではなく、ほぼ常なるもので、楽なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものととらえられるから、そう解釈される。また、「空にして無我の声」が聞こえるというのも参考になろう。

◇『無量寿経』(巻1) T12,271b「波揚無量。自然妙聲。隨其所應。莫不聞者。或聞佛聲。或聞法聲。或聞僧聲。或寂靜聲。空無我聲。大慈悲聲。波羅蜜聲。(岩波上179)」

◇『無量寿経』(巻2) T12,273a「通達諸法門。一切空無我。專求淨佛土。必成如是刹。(岩波上191)」

⑥仏国土は、浄なるものである。

◇『無量寿経』(巻1) T12,271c「彼佛國土。清淨安隱。微妙快樂。次於無為。泥洹之道。(岩波上181)」

③～⑥をまとめれば、『無量寿経』が説く阿弥陀の仏国土は常楽我浄なるものではない。なお、次によれば、阿弥陀の仏国土は一つの三千大千世界のようでもある。ただし、『大阿弥陀経』および『平等覚経』は「八方上下十億仏国」とし「三千大千世界」とはしない²⁸⁾。要検討。

『無量寿経』(巻1) T12,268a「設我得佛。國中聲聞。有能計量。乃至三千大千世界。眾生緣覺。於百千劫。悉共計校。知其數者。不取正覺。(岩波上156-157)」

2.5. 『無量寿経』が説く広大無限なる仏身と仏国土および『華嚴経』系の思想との関連

以上までなら、仏身と仏国土について『阿弥陀経』が説くところと『無量寿経』が説くところには違いはないととらえてよいであろう。ところが、『無量寿経』には、『阿弥陀経』よ

²⁸⁾ 大田利生(編)『無量寿経：漢訳五本梵本蔵訳対照』、52頁。

りも展開が進んだ、「見えない」もので、廣大無限なる、仏身と仏国土に関すると思われる内容も説かれている。この点には注意が払われるべきであろう。なお、その内容はおそらくは『華嚴經』系の思想を取り込んだものであろう。

たとえば、次の内容は、阿弥陀の仏国土に住する天や衆生の身体についてではあるが、彼らが受け用いる「自然虚無の身、無極の体」は、色身（あるいは生身）ではなく、むしろ『華嚴經』が説く「見えない」もので、廣大無限なる法身に相当する（あるいは近似する）もののようにも解釈される。なお、『大阿彌陀經』と『平等覺經』にも同様な内容が確認される。

◇『無量壽經』（巻1）T12,271c「顔貌端正。超世希有。容色微妙。非天非人。皆受自然虚無之身。無極之體。」（岩波上181）」

◇『大阿彌陀經』（巻1）T12,304b「其身體。亦非世間人之身體。亦非天上人之身體。皆積眾善之德。悉受自然虚無之身。無極之體。甚殊好無比。」

◇『平等覺經』（巻1）T12,284a「其身體者。亦非世間人之身體也。亦非天上人之身體也。皆積眾善之德。悉受自然虚無之身體。甚殊好無比。」

また次の内容は、阿弥陀の仏国土は『華嚴經』が説く「見えない」もので、廣大無限なるもので、常なる法界のようなものと説いているようにも解釈される。

◇『無量壽經』（巻1）T12,269c「一向專志。莊嚴妙土。所修佛國。開廓廣大。超勝獨妙。建立常然。無衰無變。」（岩波上167）」《所修され（莊嚴されし）仏国は、開廓広大にして（広く大きく）、超勝独妙にして（大いにすぐれ）、建立常然にして（常住し）、無衰無変にして（変化なし）。》

また次の内容も、阿弥陀の仏国土は『華嚴經』が説く清浄として、廣大無限なるもので、無礙なる（いわば異なる次元に住する）法界のようなものと説いているようにも解釈される。なお、『大阿彌陀經』と『平等覺經』にも同様な内容が確認される。

◇『無量壽經』（巻2）T12,274b「佛告彌勒菩薩。諸天人等。無量壽國。聲聞菩薩。功德智慧。不可稱説。又其國土。微妙安樂。清淨若此。何不力為善。念道之自然。著於無上下。洞達無邊際。宜各勤精進。努力自求之。必得超絕去。往生安養國。」（岩波上202）」

《その国土は、微妙安樂にして（すぐれて安樂で）、清浄なることかくの如し、…無辺際（の限りなき）を、洞達して（見通し）、…必ずや超絶し（輪廻を超え去る）を得て、安養国に往生せん。》

◇『大阿彌陀經』（巻2）T12,311c「自然成七寶。横攬成萬物。光精參明俱出。好甚殊無有極。其國土。甚若此。何不力為善。念道之自然。著於無上下。洞達無邊幅。捐志虚空中。何不各精進。努力自求索。可得超絕去。往生阿彌陀佛國。」

◇『平等覺經』（巻3）T12,293c「自然成七寶。横攬成萬物。光精參明俱出。好甚殊無有極。其國土。甚殊好若此。何不力為善。念道之自然。著於無上下。洞達無邊幅。捐志虚空中。何不各精進。努力自求索。可得超絕去。往生無量清淨。阿彌陀佛國。」

『無量壽經』には、他にも『華嚴經』系の思想を取り込んだと思われる内容が説かれている。たとえば、次は『華嚴經』に同じく普賢菩薩を上首とする。

◇『無量壽經』（巻1）T12,265c「又與大乘眾菩薩俱。普賢菩薩。妙德菩薩。慈氏菩薩等。此賢劫中。一切菩薩。…皆遵普賢。大士之德。具諸菩薩。無量行願。安住一切。功德之法。」（岩波上140）」

また次は、『華嚴經』が重んじるいわゆる普賢行に関わるものといえよう

◇『無量壽經』（巻1）T12,268b「除其本願。自在所化。為眾生故。…現前修習普賢之德。（岩波上158）」

そして次は、明らかに『華嚴經』系の思想を取り込んだものである。

◇『無量壽經』（巻1）T12,266b「深入菩薩法藏。得佛華嚴三昧。（岩波上144）」

以上は、一説によれば、『阿弥陀經』の方が『無量壽經』系の經典よりも後に成立したとされるが²⁹、少なくとも仏身と仏国土についての内容に関してならば、『阿弥陀經』の方が『無量壽經』よりも古い思想をそのままに伝えていることをしめすものといえよう。

また次の『無量壽經』の内容は、さらに展開が進んだ仏身論ととらえることもできよう。というのは、仏身は不変なるものであるから、樂なるものと説いているようにも解釈されるからである。なお、廣大無限なる上にさらに樂なる法身を明らかに説くのが、たとえば『涅槃經』である³⁰。

◇『無量壽經』（巻1）T12,266c「當知如來正覺。其智難量。多所導御。慧見無礙。無能遏絕。以一喰之力。能住壽命。億百千劫。無數無量。復過於此。諸根悅豫。不以毀損。姿色不變。光顏無異。所以者何。如來定慧。究暢無極。於一切法。而得自在。（岩波上147）」《よく壽命をとどめ、億百千劫、無数無量にして、またこれを過ぎたり。諸根（の器官）は、悦豫に（満足して）、もってこわれず、すがたは不変にして、光顏（の顔色）にかわりなし。》

また次は、求道者の娑婆世界における努力は、阿弥陀の仏国土を含むその他の多くの仏国土における努力よりもまさるとする。この点は大乗における仏国土の意味合いを考える上で重要になってこよう。

◇『無量壽經』（巻2）T12,277c「正心正意。齋戒清淨。一日一夜。勝在無量壽國。為善百歲。所以者何。彼佛國土。無為自然。皆積眾善。無毛髮之惡。於此修善。十日十夜。勝於他方。諸佛國中。為善千歲。所以者何。他方佛國。為善者多。為惡者少。福德自然。無造惡之地。（岩波上226-227）」《（娑婆世界における努力の）一日一夜は、無量壽国において善をなすこと百歳にまさる…》

3. 『觀無量壽經』

3-1. 『觀無量壽經』が説くところ

次に分析する『觀無量壽經』は、阿弥陀の仏国土に往生したいと思えば、阿弥陀とその仏国土を觀想すれば（すなわち心に思い描けば）よいと説く經典である。『觀無量壽經』は、梵本もチベット語訳も伝わっておらず、成立年代も成立地も所説紛々で不明である。一方、漢訳は、劉宋の曇良耶舎（後5世紀）によるとされる³¹。

『觀無量壽經』は、『阿弥陀經』と『無量壽經』との関連から考えるに、基本的には、時に「見える」もので、廣大無限にもなり得るが大きさは自由自在に変化をする「色身」による一

²⁹ 静谷正雄「羅什訳『阿弥陀經』の成立について」、95頁。辛嶋静志「大乗仏教とガンダーラ」、468頁。

³⁰ 別稿「『大乗涅槃經』が説く」を参照。

³¹ 平川彰『浄土思想と大乗戒』、157頁。藤田宏達『原始浄土思想の研究』、123頁。望月信亨『仏教經典成立史論』（法蔵館、1978年）、225頁。

身説を説くものといえそうである。ただし、それが発現する（させる）「化身」をあわせての二身説ととらえることもできよう。さらには、「見えない」もので、廣大無限なる法身に相当する「法界身」が「色身」を発現する（させる）と解釈を展開させることも可能なようにも思われる。したがって、三身説ととらえることもできそうである。いずれにせよ、その内容は、「法界身」、「色身」といった用語やその意味するところなどから判断するに、『無量寿経』の内容よりもさらに展開が進んでいるようである。また、その仏国土論は、「見える」色身が住するところは廣大無限なるものではないが、「見えない」法界身が住するところは廣大無限なるものと解釈を展開させることもできそうである。

3-2. 『観無量寿経』が説く仏身

ここでは『観無量寿経』が説く阿弥陀の仏身の特徴を分析する。

①阿弥陀の仏身は、時に「見える」ものである。たとえば、観音と勢至を伴って現れるとされ、八万四千の特徴をもつとされるから、そう解釈される。

◇『観無量寿佛経』（巻1）T12,342c「説是語時。無量壽佛。住立空中。觀世音。大勢至。是二大士。侍立左右。（第7觀、岩波下56）」

◇『観無量寿佛経』（巻1）T12,344c「迴向發願。生彼佛國。具此功德。一日乃至七日。即得往生。生彼國時。此人精進勇猛故。阿彌陀如來。與觀世音。及大勢至。無數化佛。百千比丘。聲聞大眾。無量諸天。七寶宮殿。觀世音菩薩。執金剛臺。與大勢至菩薩。至行者前。（上品上生、岩波下69）」

◇『観無量寿佛経』（巻1）T12,343b「無量壽佛。有八萬四千相。一一相中。各有八萬四千隨形好。一一好中。復有八萬四千光明。一一光明。遍照十方世界。念佛眾生。攝取不捨。（第9觀、岩波下61）」

②阿弥陀の仏身は、廣大無限にもなり得るが大きさは自由自在に変化をするものらしい。「身量無辺（すなわち廣大無限）なる」ものとされるが、時に左右に観音と勢至を伴い空中に住立するともされるから、そう解釈される。また、仏身が「廣大無限なる」ものとは言い切れないのは、阿弥陀が住する仏国土が西方に位置するとされるからでもある。なお、阿弥陀の仏身は、この点については、大衆部が説く色身に近似するものととらえておくこともできよう³²。

◇『観無量寿佛経』（巻1）T12,344b「無量壽佛。身量無邊。（第13觀、岩波下67-68）」

◇『観無量寿佛経』（巻1）T12,342c「説是語時。無量壽佛。住立空中。觀世音。大勢至。是二大士。侍立左右。（第7觀、岩波下56）」

次によれば、阿弥陀は無数の化身を発現するとされる。これは色身が化身を発現すると解釈することもできよう。

◇『観無量寿佛経』（巻1）T12,344b「無量壽佛。化身無數。與觀世音。及大勢至。常來至此。行人之所。（第12觀、岩波下67）」

また、次によれば、『華嚴経』が説く法身に相当する「見えない」もので、廣大無限なる「法界身」が「色身」を発現すると解釈を展開させることも可能であろう。

³² 拙稿「いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現された」を参照。準備中。

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,343a 「諸佛如來。是法界身。遍入一切眾生心想中。是故汝等。心想佛時。是心即是。三十二相。八十隨形好。是心作佛。是心是佛。諸佛正遍知海。從心想生。是故應當。一心繫念。諦觀彼佛。多陀阿伽度。阿羅呵。三藐三佛陀。(第8觀、岩波下58-59)」

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,344c 「往生彼國。生彼國已。見佛色身。眾相具足。(上品上生、岩波下70)」

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,343c 「見無量壽佛者。即見十方無量諸佛。得見無量諸佛故。諸佛現前受記。是為遍觀。一切色想〔色想=色身相〕。名第九觀。(第9觀、岩波下62)」

③阿弥陀の仏身は、ほぼ常(ただし有始)なるものである。阿弥陀は、法蔵菩薩が成仏した(したがって有始なる)無量壽仏とされるから、そう解釈される。

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,345c 「此人命欲終時。遇善知識。為其廣說。阿彌陀佛。國土樂事。亦說法蔵比丘。四十八大願。聞此事已。尋即命終。譬如壯士。屈伸臂頃。即生西方。極樂世界。(中品下生、岩波下75)」

④阿弥陀の仏身は、樂なるものではない。阿弥陀は姿を現し説法をするとされるので、変化をするものであるから、そう解釈される。

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,344c 「迴向發願。生彼佛國。具此功德。一日乃至七日。即得往生。生彼國時。此人精進勇猛故。阿彌陀如來。與觀世音。及大勢至。無數化佛。百千比丘。聲聞大眾。無量諸天。七寶宮殿。觀世音菩薩。執金剛臺。與大勢至菩薩。至行者前。(上品上生、岩波下69)」

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,345b 「行者臨命終時。阿彌陀佛。與諸比丘。眷屬圍繞。放金色光。至其所。演說苦空。無常無我。讚歎出家。得離眾苦。(中品上生、岩波下73)」

⑤阿弥陀の仏身は、我なるものではない。以上によれば、必ずしも廣大無限なるものではなく、ほぼ常なるもので、樂なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものにとらえられるから、そう解釈される。

⑥阿弥陀の仏身は、淨なるものらしい。阿弥陀は淨業をなしたものとされるから、間接的ながらそう解釈される。

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,341c 「此三種業。乃是過去。未來現在。三世諸佛。淨業正因。(序説、岩波下49)」

③～⑥をまとめれば、『觀無量壽經』が説く阿弥陀の仏身は常樂我淨なるものではない。

なお、次には仏身と仏心と大慈悲の關係が説かれている。その内容は、我はすなわち慈のことであると説く『涅槃經』の内容に通じるものともいえよう³³⁾。

◇『觀無量壽佛經』(卷1) T12,343b-c 「見此事者。即見十方。一切諸佛。以見諸佛故。念佛三昧。作是觀者。名觀一切佛身。以觀佛身故。亦見佛心。諸佛心者。大慈悲是。(第9觀、岩波下61-62)」

3-3. 『觀無量壽經』が説く仏国土

ここでは『觀無量壽經』が説く阿弥陀の仏国土の特徴を分析する。

³³ 別稿「『大乘涅槃經』が説く」を参照。

①仏国土は、時に「見える」ものである。条件がそろえば、「見える」ものとされるから、そう解釈される。

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,341c「如來今者。教韋提希。及未來世。一切眾生。觀於西方。極樂世界。以佛力故。當得見彼。清淨國土。如執明鏡。自見面像。見彼國土。極妙樂事。心歡喜故。應時即得。無生法忍。(序説、岩波下49)」

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,341c「如我今者。以佛力故。見彼國土。若佛滅後。諸眾生等。濁惡不善。五苦所逼。云何當見。阿彌陀佛。極樂世界。(序説、岩波下50)」

②仏国土は、広大無限なるものではないらしい。西方に位置するとされるから、そう解釈される。ただし、遠くないとされるから、時に「見える」色身が住する「見える」仏国土は遠くにあるが、一方、「見えない」法界身が住する「見えない」仏国土は広大無限なるものと解釈を展開させることも可能であろう。

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,341c「汝今知不。阿彌陀佛。去此不遠。汝當繫念。諦觀彼國。淨業成者。我今為汝。廣説眾譬。亦令未來世。一切凡夫。欲修淨業者。得生西方。極樂國土。(序説、岩波下48)」

③仏国土は、ほぼ常なるものである。阿彌陀はほぼ常(ただし有始)なるもので、その阿彌陀が住するところであるから、そう解釈される。

④仏国土は、樂なるものではない。たとえば、風が吹くとされるので、変化をするものであるから、そう解釈される。

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,342a「八種清風。從光明出。鼓此樂器。演説苦空無常。無我之音。(第2觀、岩波下52)」

⑤仏国土は、我なるものではない。以上によれば、必ずしも広大無限なるものではなく、ほぼ常なるもので、樂なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものととらえられるから、そう解釈される。その仏国土を見れば、無生法忍(むしょう・ほうにん)が得られる(要するに空であることが理解される)とされるのも参考になろう。

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,341c「見彼國土。極妙樂事。心歡喜故。應時即得。無生法忍。(序説、岩波下49)」

⑥仏国土は、淨なるものである。

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,341c「如來今者。教韋提希。及未來世。一切眾生。觀於西方。極樂世界。以佛力故。當得見彼。清淨國土。(序説、岩波下49)」

③～⑥をまとめれば、『観無量壽經』が説く阿彌陀の仏国土は常樂我淨なるものではない。なお、次によれば、阿彌陀の仏国土は一つの三千大千世界のようでもある。ただし、必ずしも明らかではない。

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,342b「是寶蓋中。映現三千大千世界。一切佛事。(岩波下54)」

◇『観無量壽佛經』(卷1) T12,343b「彼佛圓光。如百億三千大千世界。(岩波下61)」

3-4.『観無量壽經』と西方淨土變

ここでは、西方淨土變は阿彌陀淨土を描いたものではないと副題する理由を述べる。『観無量壽經』が説く仏身と仏国土は、とりあえず先のとおり解釈しておくことができよう。ただし、厳密にはそれでは問題がありそうである。というのは、『観無量壽經』が説くいわゆる十

六観に関する多くの内容は、阿弥陀の仏身と仏国土の有り様を必ずしも直接的に詳しく説明したのではなく³⁴、むしろそれらを観想する（すなわち心に思い描く）ための参考情報というべきものであるからである³⁵。たとえば、先述したように『無量寿経』系の經典が説く阿弥陀の仏国土には、日、月、星辰はないとされる³⁶。一方、『観無量寿経』が説く十六観のうちの初観は、日没の様を観想するものである。これは、『観無量寿経』には観想の結果となるべき阿弥陀の仏身と仏国土の有り様が必ずしも直接的には説かれていないことをしめす一例といえよう。阿弥陀の仏身と仏国土の実際の有り様は『観無量寿経』が説くところをさらに展開させてはじめて得られるものなのである。したがって、『観無量寿経』に（より正確に）もとづけばもとづくほど、阿弥陀の仏身と仏国土の実際の有り様から離れたものになってしまう可能性が出てくるのである。それゆえ、見方によっては、『観無量寿経』にもとづいたとされる西方浄土変は、実は阿弥陀浄土そのものを描いたものではないと議論を展開させることもできよう。

ただし、『無量寿経』系の經典が説く阿弥陀の仏国土には、日、月、星辰はないとされるが、筆者は思うに、正確なところはそうではないであろう。というのは、『大阿彌陀經』と『平等覺經』によれば、阿弥陀の光明が極めて明るいから、日、月、星辰は虚空中にとどまり動くことなく輝きを失ってしまっているとされるからである。なお、これに相当する内容は『無量寿経』には説かれていない³⁷。要検討。

◇『大阿彌陀經』（卷1）T12,308b「阿彌陀佛。頂中光明。極大光明。其日月星辰。皆在虚空中住止。不可復迴轉運行。亦無有精光。其明皆蔽不復見。佛光明照國中。及焰照他方佛國。常大明。終無有冥時。」

◇『清淨平等覺經』（卷3）T12,290b「無量清淨佛。項中光明。極大明。其日月星辰。皆在虚空中住止。亦不復迴轉運行。亦無有精光。其明皆蔽不復現。無量清淨佛。光明照國中。及焰照他方佛國。常大明。終無有當冥時也。」

4. 『往生論』

4.1. 『往生論』が説くところ

次に分析する『往生論（すなわち無量寿経優婆提舍願生偈）』は、中国の浄土教が大いに展開する契機をもたらした重要な仏典の一つである。婆藪槃豆（世親、後5世紀前半以前）が、『無量寿経』（正確には、そのいずれかの原本）にもとづき、自ら阿弥陀の仏国土を観想し、阿弥陀にまみえ、すべての衆生とともにその仏国土に往生したいと願った偈ならびにその論である。漢訳は北魏の菩提流支（後6世紀前半頃）による。梵本は伝わっていない。

『往生論』に説かれる仏身論は、基本的には、時に「見える」色身に相当するものによる一身説のようにもとらえられるが、清浄なるものでかつ無為（すなわち変化をしない、すなわち

³⁴ 次のように「詳しくは説けない（不可具説。）」ものともされる。『観無量壽佛經』（卷1）T12,342a「名為粗見。極樂國地。若得三昧。見彼國地。了了分明。不可具説。（第3観、岩波下52）」

³⁵ すでに指摘がある。平川彰『浄土思想と大乘戒』、138頁、151頁。

³⁶ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』、443頁。

³⁷ 大田利生（編）『無量寿経：漢訳五本梵本蔵訳対照』、116頁。

楽)なる「法身」や³⁸⁾、菩薩の「法身」および「応化身」も説いているので、あるいは「見えない」法身をあわせた二身説あるいは三身説と解釈を展開させることもできそうである。なお、三身説ととらえる場合は、人間(あるいはそれに相当するもの)として般涅槃に入る前においては常に(あるいはほぼ常に)「見える」仏身を加えることになる。

仏国土については、阿弥陀の仏国土が西方に位置することは説かれず、娑婆世界とは次元が異なる広大無限なるものと説かれているらしい点には、とくに注意が払われるべきであろう。したがって、広大無限なる法界を説く『華嚴経』系の思想あるいはそれを展開させた『涅槃経』系の思想が取り込まれているようにも思われる³⁹⁾。

4-2. 『往生論』が説く仏身

ここでは『往生論』が説く阿弥陀の仏身の特徴を分析する。

①阿弥陀の仏身は、時に見えるものである。阿弥陀にまみえて、その仏国土に往生することを願っているから、そう解釈される。

◇『往生論(無量壽經優波提舍願生偈)』(巻1) T26,231b 「〈偈〉我作論説偈。願見彌陀佛。普共諸眾生。往生安樂國。(国訳5)」

◇『往生論』(巻1) T26,231b 「〈論〉此願偈明何義。觀安樂世界。見阿彌陀佛。願生彼國土故。(国訳5-6)」

◇『往生論』(巻1) T26,231a 「〈偈〉相好光一尋。色像超群生。(国訳4)」

◇『往生論』(巻1) T26,232a 「〈論〉何者身莊嚴。偈言相好光一尋色像超群生故。(国訳10)」

◇『往生論』(巻1) T26,231b 「〈論〉若善男子善女人。修五念門成就者。畢竟得生安樂國土。見彼阿彌陀佛。(国訳6)」

ただし、次によれば、(菩薩と同様に)阿弥陀は「見えない」法身をもち、「見える」応化身を発現する(させる)と解釈を展開させることもできよう。さらには、『涅槃経』のように、阿弥陀の「法身」はそもそもは「見える」ものであるが、(ブッダ以外の者は煩惱に覆われているので)ブッダ以外の者には基本的には「見えない」ものと議論を展開させることも可能であろう。

◇『往生論』(巻1) T26,232b 「〈論〉一法句者。謂清淨句。清淨句者。謂真實智慧。無為法身故。(国訳12)」

◇『往生論』(巻1) T26,232a-b 「〈論〉即見彼佛。未證淨心菩薩。畢竟得平等法身。與淨心菩薩無異。淨心菩薩。與上地諸菩薩。畢竟同得。寂滅平等故。(国訳11)」

◇『往生論』(巻1) T26,232b 「〈論〉二者彼應化身。一切時不前不後。一心一念。放大光明。悉能遍至。十方世界。教化眾生。(国訳11-12)」

②阿弥陀の仏身は、広大無限なるもの(あるいはそのようになり得るもの)かもしれない。仏国土は広大無限なるものとされるから、そう解釈を展開させることもできよう。

³⁸⁾ 『往生論』(巻1) T26,232b 「〈論〉一法句者。謂清淨句。清淨句者。謂真實智慧。無為法身故。(国訳12)」

³⁹⁾ さらに考察のためには、あるいは次を参照。平川彰『浄土思想と大乘戒』、102頁。

③阿弥陀の仏身は、ほぼ常（ただし有始）なるものらしい。經典名から判断するに、『無量寿經』にもとづくものであり、阿弥陀は（有始なる）無量寿仏と思われるから、そう解釈される。ただし、ほぼ常なるものは時に「見える」応化身（あるいはそれに相当するもの）で、「見えない」法身は常なるものと解釈を展開させることもできよう。

④阿弥陀の仏身は、楽なるものではない。説法をされるとされるので、変化をするものであるから、そう解釈される。ただし、法身は無為なる（すなわち変化をしない）ものともされるので、説法をするのは「見える」応化身（あるいはそれに相当するもの）で、「見えない」法身は説法をしないから楽なるものと解釈を展開させることもできよう。

◇『往生論』（巻1）T26,231a「〈偈〉如來微妙聲。梵響聞十方。（国訳4）」

◇『往生論』（巻1）T26,232a「〈論〉何者口莊嚴。偈言如來微妙聲。梵響聞十方故。（国訳10）」

『往生論』（巻1）T26,232b「〈論〉一法句者。謂清淨句。清淨句者。謂眞實智慧。無為法身故。（国訳12）」

⑤阿弥陀の仏身は、我なるものではない。以上によれば、ほぼ常なるもので、楽なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものととらえられるから、そう解釈される。ただし、先に成立した『涅槃經』の仏身論をもって、「見える」応化身（あるいはそれに相当するもの）を発現させる「見えない」法身は我なるものと解釈を展開させることもできよう。

⑥阿弥陀の仏身は、浄なるものである。

◇『往生論』（巻1）T26,232b-c「〈論〉此清淨。有二種應知。何等二種。一者器世間清淨。二者眾生世間清淨。器世間清淨者。向説。十七種佛國土功德莊嚴成就。是名。器世間清淨。眾生世間清淨者。如向説。八種佛功德莊嚴成就。四種菩薩功德莊嚴成就。是名。眾生世間清淨。如是一法句。攝二種清淨應知。（国訳12-13）」

③～⑥をまとめれば、『往生論』が説く、時に「見える」阿弥陀の仏身は、常楽我浄なるものではない。一方、『往生論』は、ブツダには常に「見える」が衆生には「見えない」もので、そして廣大無限なるもので、さらには常楽我浄なる阿弥陀の法身をも説いていると解釈を展開させることもできよう。

4.3. 『往生論』が説く仏国土

ここでは『往生論』が説く阿弥陀の仏国土の特徴を分析する。

①仏国土は、時に「見える」ものである。たとえば、宮殿や樹木があるとされるから、そう解釈される。ただし「見えない」法身が住するところは「見えない」ものと解釈を展開させることもできよう。

◇『往生論』（巻1）T26,231a「〈偈〉宮殿諸樓閣。觀十方無礙。雜樹異光色。寶欄遍圍繞。（国訳2）」

◇『往生論』（巻1）T26,231c「〈論〉莊嚴地者。偈言宮殿諸樓閣。觀十方無礙。雜樹異光色。寶欄遍圍繞故。（国訳9）」

②仏国土は、廣大無限なるものである。そして、三界（すなわち欲界、色界、無色界からなる娑婆世界と同じ次元）を超えた（娑婆世界とは次元を異にする）ところに住するものらしい。この点は、阿弥陀の仏国土が西方にあるものではなくすべてのところにあることをしめすものであるから、大いに注意が払われるべきであろう。さらに、仏国土は無礙なる（すなわち相互

透過性をもつ)ものらしい。もしそうではなければ、たとえば娑婆世界が障害となり、廣大無限なるものではなくなくなってしまおう。

◇『往生論』(巻1) T26,230c 「〈偈〉 觀彼世界相。勝過三界道。究竟如虛空。廣大無邊際。

(国訳1)」《彼の世界の相を觀るに、三界の道に勝過して(はるかにまさり)、究竟(の極まりは)虚空のごとく、廣大にして無邊際(の限りなし)》

◇『往生論』(巻1) T26,231c 「〈論〉 清淨功德成就者。偈言觀彼世界相。勝過三界道故。(国訳8)」

◇『往生論』(巻1) T26,231c 「〈論〉 量功德成就者。偈言究竟如虛空。廣大無邊際故。(国訳8)」

③仏国土は、少なくともほぼ常なるものである。阿弥陀はほぼ常(ただし有始)なるもので、その阿弥陀が住するところであるから、そう解釈される。ただし、阿弥陀の法身は常なるもので、その法身が住するところであるから、仏国土も常なるものと解釈を展開させることもできよう。

④仏国土は、樂なるものではない。風が吹くとされるので、変化をするものであるから、そう解釈される。ただし、「見えない」法身が住するところは、樂なるものと解釈を展開させることもできよう。

◇『往生論』(巻1) T26,230c 「〈偈〉 寶華千萬種。彌覆池流泉。微風動華葉。交錯光亂轉。(国訳2)」

◇『往生論』(巻1) T26,231c 「〈論〉 莊嚴水者。偈言寶華千萬種。彌覆池流泉。微風動華葉。交錯光亂轉故。(国訳9)」

⑤仏国土は、我なるものではない。以上によれば、ほぼ常なるもので、樂なるものではなく変化をするものなので、要するに空なるものととらえられるから、そう解釈される。ただし、「見えない」法身は我なるもので、その法身が住するところであるから仏国土も我なるものと解釈を展開させることもできよう。

⑥仏国土は、淨なるものである。

◇『往生論』(巻1) T26,230c 「〈偈〉 觀彼世界相。勝過三界道。(国訳1)」

◇『往生論』(巻1) T26,231c 「〈論〉 清淨功德成就者。偈言觀彼世界相。勝過三界道故。(国訳8)」

◇『往生論』(巻1) T26,231a 「〈偈〉 安樂國清淨。常轉無垢輪。化佛菩薩日。如須彌住持。(国訳5)」

◇『往生論』(巻1) T26,232b 「〈論〉 一者於一佛土。身不動搖。而遍十方。種種應化。如實修行。常作佛事。偈言安樂國清淨。常轉無垢輪。化佛菩薩日。如須彌住持故。開諸眾生淤泥華故。(国訳11)」

◇『往生論』(巻1) T26,232b-c 「〈論〉 此清淨。有二種應知。何等二種。一者器世間清淨。二者眾生世間清淨。器世間清淨者。向說。十七種佛國土功德莊嚴成就。是名。器世間清淨。眾生世間清淨者。如向說。八種佛功德莊嚴成就。四種菩薩功德莊嚴成就。是名。眾生世間清淨。如是一法句。攝二種清淨應知。(国訳12-13)」

③～⑥をまとめれば、『往生論』が説く、時に「見える」仏国土は、常樂我淨なるものではない。一方、『往生論』は、ブッダには常に「見える」が衆生には「見えない」廣大無限なるもので、常樂我淨なる仏国土をも説いていると解釈を展開させることもできよう。いずれにせ

よ、阿弥陀の仏国土は一つの三千大千世界ではなく、娑婆世界とは次元を異にする広大無限なるものということになる。

5.『大乘同性経』が説くところ

次に分析する『大乘同性経』は、北周の闍那耶舎（後6世紀）が後570年に漢訳した經典で、別名『説一切仏行入智毘盧遮那蔵経』とも呼ばれる。経名に「毘盧遮那」とある点からも『華嚴経』系の思想を展開させたものであることがしられる。極楽に住する阿弥陀（正確にはその仏身）は報身とする唐の道綽（後562-645年）の解釈に理論的な根拠を与えた重要な經典の一つであるから、若干ながらここで取り上げておこう。

『大乘同性経』は、仏身について、「真身」と「報身」と「応身」による三身説を説く。それによれば、真身とは、法身のことで、たとえば、①「不可見」「無相」とされるから「見えない」もので、②「無辺身」とされるから広大無限なるもので、③「無生」「無滅」とされるから常なるもので、④「無言説」「不壊身」とされるから楽なるものであるが、⑤「無住處」とされるから空なるものであり我なるものではなく、⑥「至真身」とされるから浄なるもので、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではないといった特徴があるものとされる。

◇『大乘同性経』（巻2）T16,651c「海妙深持自在智通菩薩復問佛言。世尊。何者名為如來法身。佛言。善丈夫。如來真法身者。無色。無現。無著。不可見。無言説。無住處。無相。無報。無生。無滅。無譬喩。如是。善丈夫。如來不可説身。法身智身。無等身。無等等身。毘盧遮那身。虛空身。不斷身。不壊身。無邊身。至真身。非虛假身。無譬喩身。是名真身。（一切35）」

また次によれば、報身とは、清浄なる仏国土に現れてブツダになる（なった）ものとされる。

◇『大乘同性経』（巻2）T16,651c「海妙深持自在智通菩薩復問佛言。世尊。何者名為如來報身。佛言。善丈夫。若欲身彼佛報者。汝今當知。如汝今日見我。現諸如來。清浄佛刹。現得道者。當得道者。如是一切。即是報身。（一切34-35）」

また次によれば、応身とは、兜率天から下り、穢濁の世に（したがって穢土に）現れてブツダになる（なった）ものとされる。なお、この成仏したところが浄土か穢土かにより報身か応身かの違いが生じるとする点が『大乘同性経』の大きな特徴の一つである。

◇『大乘同性経』（巻2）T16,651c「海妙深持自在智通菩薩復問佛言。世尊。何者名為如來應身。佛言。善丈夫。猶若今日踊步捷如來。魔恐怖如來。大慈意如來。有如是等。一切彼如來。穢濁世中。現成佛者。當成佛者。如來顯現。從兜率下。乃至住持。一切正法。一切像法。一切末法。善丈夫。汝今當知。如是化事。皆是應身。（一切35）」

また次によれば、阿弥陀は清浄なる仏国土に生まれブツダになったものとされる。

◇『大乘同性経』（巻2）T16,651b「復有阿彌陀如來。蓮花開敷星王如來。龍主王如來。寶徳如來。有如是等。生浄佛刹。所得道者。彼諸如來得初佛地。（一切33）」

以上の『大乘同性経』などにもとづき、道綽は、仏身にも仏国土にも三種類あることを『安楽集』略明三身三土義に説く。そして、従来のように阿弥陀を化身と極楽を化土ととらえるのは大きな誤りとする。さらには、阿弥陀も三種類の仏身をもつものとし、とくに極楽に出現する阿弥陀の仏身は報身であり、極楽は報土であるとする。

◇『安樂集』（巻1）T47,5c「第七。略明三身三土義。問曰。今現在阿彌陀。佛是何身。極樂之國是何土。答曰。現在彌陀是報佛。極樂寶莊嚴國是報土。然古舊相傳皆云。阿彌陀佛是化身。土亦是化土。此為大失也。若爾者。穢土亦化身所居。淨土亦化身所居者。未審如來報身更依何土也。今依大乘同性經。辨定報化。淨穢者。經云。淨土中成佛者。悉是報身。穢土中成佛者。悉是化身。悉是化身。彼經云。阿彌陀如來。蓮華開敷星王如來。龍主王如來。寶德如來。等諸如來。清淨佛剎。現得道者。當得道者。如是一切。皆是報身佛也。」

◇『安樂集』（巻1）T47,6a「然阿彌陀佛。亦具三身。極樂出現者。即是報身。」

◇『安樂集』（巻1）T47,6b「今此無量壽國。即是從真。垂報國也。」

なお、筆者は思うに、以上のように阿彌陀の仏国土（すなわち極樂）が報土であるならば、それは娑婆世界の衆生にはまずは「見えない」ものということになってこよう。

おわりに

小稿では、『阿彌陀經』、『無量壽經』、『觀無量壽經』、『往生論』、『大乘同性經』から情報を抽出し、初歩的な考察を加えながら、分析整理した。

『阿彌陀經』が説く仏身論は、時に「見える」ものであるが、廣大無限なるものではない色身（あるいは生身）に相当するものによる一身説といえそうである。また仏国土論も、「見える」ものであるが、廣大無限なるものではない仏国土を説くものらしい。

『無量壽經』が説く仏身論は、基本的には、時に「見える」ものであるが、廣大無限なるものではない色身（あるいは生身）に相当するものによる一身説といえそうである。ただし、「見えない」もので、廣大無限なる法身に相当するものに関する思想が取り込まれているようにも解釈される。また、その仏国土論にも同様に「見えない」もので、廣大無限なるものに関わる思想が取り込まれているようにも解釈される。

『觀無量壽經』は、基本的には、時に「見える」もので、廣大無限にもなり得るが大きさは自由自在に変化をする「色身」による一身説を説くものといえそうである。ただし、「見えない」法身に相当する「法界身」をあわせた二身説あるいは三身説ととらえることもできそうである。いずれにせよ、その内容は『無量壽經』の内容よりもさらに展開が進んでいるように思われる。また、その仏国土論は、「見える」色身が住するところは廣大無限なるものではないが、一方、「見えない」法界身が住するところは廣大無限なるものと解釈を展開させることもできそうである。そして、もしそうであれば、『觀無量壽經』には、娑婆世界とは次元が異なる廣大無限なる仏国土が説かれているということにもなってこよう。

『往生論』に説かれる仏身論は、基本的には、時に「見える」色身に相当するものによる一身説のようにもとらえられるが、「見えない」法身をあわせた二身説あるいは三身説ととらえることもできそうである。仏国土論については、阿彌陀の仏国土が西方に位置することは説かれず、娑婆世界とは次元が異なる廣大無限なるものと説かれているらしい点には、とくに注意が払われるべきであろう。

『大乘同性經』は、仏身について「真身」と「報身」と「応身」による三身説を説く。その説にもとづき、唐の道綽は、極樂に出現する阿彌陀は報身であり、極樂は報土であるとする。

筆者は思うに、もし以上のおりであれば、とくに『往生論』、『大乘同性經』および道綽が説くところから、〈衆生には「見えない」報身の阿彌陀が住する、衆生には「見えない」極

楽は、娑婆世界とは次元が異なるものの、広大無限なるものであるから、衆生は、気づいてはいないものの、実のところはすでに極楽の中に住している」と、換言すれば、〈娑婆世界はすなわち極楽（正確には娑婆世界 \subset 極楽、すなわち娑婆世界は極楽の真部分集合）である〉と解釈を展開させることもできよう。なお、はたしてそのような展開が実際に起きていたかどうかについては、今後の研究にゆだねたい⁴⁰。また、西方浄土変は、『観無量寿経』にもとづくものであれば、阿弥陀の報身と報土を心に思い描くための参考画像ということもできるのではなかろうか。

(2020年8月23日に口頭発表の原稿を加筆修正。)

主な引用参考文献など

岩波上：中村元、早島鏡正、紀野一義（訳註）『浄土三部経』上、無量寿経（岩波書店、2000年）。

岩波下：中村元、早島鏡正、紀野一義（訳註）『浄土三部経』下、観無量寿経、阿弥陀経（岩波書店、2000年）。

一切：『大乘同性経』（國譯一切経集部11）。

国訳：『國譯無量壽経優波提舍願生偈』（國譯大藏經論部第5巻）。

赤沼智善『佛教経典史論』（法蔵館、1981年）。

池本重臣『大無量寿経の教理史的研究』（永田文昌堂、1958年）。

岩井昌悟「一世界一佛と多世界多佛」（『東洋学論叢』36、2011年）、164-138（31-57）頁。

岩井昌悟「今は無佛時代か有佛時代か?：佛の遺骨と生きている佛」（『東洋学論叢』37、2012年）、118-91（51-78）頁。

大田利生（編）『無量寿経：漢訳五本梵本蔵訳対照』（永田文昌堂、2005年）。

大西磨希子『西方浄土変の研究』（中央公論美術出版、2007年）。

大西磨希子『唐代佛教美術史論攷：仏教文化の伝播と日唐交流』（法蔵館、2017年）。

香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房佛書林、1993年）。

梶山雄一「般舟三昧経」（『浄土仏教の思想』第2巻、講談社、1992年）。

梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』梶山雄一著作集第3巻（吹田隆道編、春秋社、2012年）。

梶山雄一『浄土の思想』梶山雄一著作集第6巻（吹田隆道編、春秋社、2013年）。

辛嶋静志「大乘仏教とガンダーラ：般若経・阿弥陀・観音」（『創価大学国際仏教学高等研究所年報』17、2014年）、449-485頁。

桜部建「初期浄土経典の成立(仏典成立の諸問題<特集>)」（『東洋学術研究』23(1)、1984年）、182-193頁。

⁴⁰ この点が検討される時には、日本の真言宗大伝法印流の創始者である覚鑿（後1095-1143年）の撰とされる『一期大要秘密集』の内容は読み落とされてはならないであろう。次に注目されるべき考察がある。ジャクリン・I・ストーン「往生の秘訣：平安日本の臨終行儀」（『現世の活動と来世の往生』実践仏教Ⅱ、臨川書店2020年）、121-191頁、157-161頁。

静谷正雄「羅什訳『阿弥陀経』の成立について」（『印度学仏教学研究』25(1)、1976年）95-100頁。

静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』（百華苑、1974年）。

末木文美士「『観無量寿経』研究」（『東洋文化研究所紀要』101、1986年）、163-225頁。

末木文美士「般舟三昧経をめぐる」（『インド哲学と仏教：藤田宏達博士還暦記念論集』、平楽寺書店、1989年）、313-332頁。

末木文美士「観無量寿経」（『浄土仏教の思想』第2巻、講談社、1992年）。

ジャクリーン・I・ストーン（著）中山慧輝（訳）「往生の秘訣：平安日本の臨終行儀」（船山徹編『現世の活動と来世の往生』実践仏教II、臨川書店2020年）、121-191頁。

曾和義宏「道綽の仏身仏土論の特異性」（『印度学仏教学研究』53(1)、2004年）169-171頁。

田辺勝美「阿弥陀仏の起源：無量光・無量寿仏はガンダーラの金箔押し仏像から生まれた」（『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』2019年）、11-35頁。

平川彰『浄土思想と大乘戒』平川彰著作集第7巻、（春秋社、1990年）。

藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970年）。

船山徹『仏教の聖者：史実と願望の記録』京大人文研東方学叢書8（臨川書店、2019年）。

眞野龍海「小阿弥陀経の成立」（『印度学仏教学研究』14(2)、1966年）、171-180年。

望月信亨『仏教経典成立史論』（法蔵館、1978年）。

矢吹慶輝『阿彌陀佛の研究』増訂改版（明治書院、1937年）。

後記

本研究発表のための資料収集において、船山徹氏、稲本泰生氏にご指導ご協力をいただいた。記して御礼を申し上げます。